

ブックレットを出版できたワケ & 学び

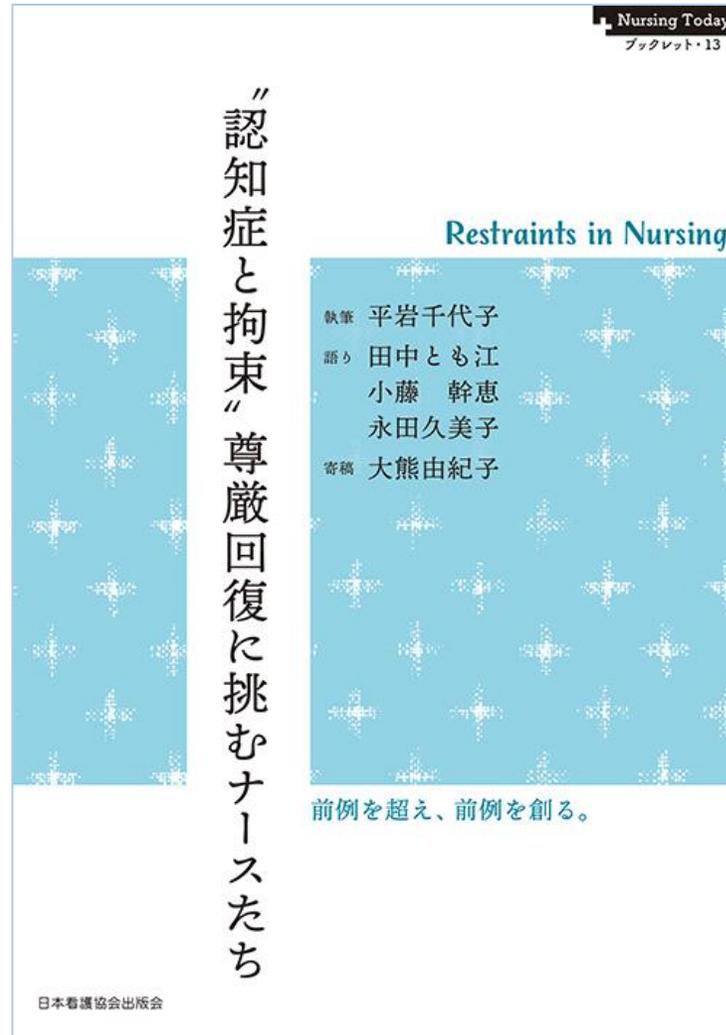
『“認知症と拘束”尊厳回復に挑むナースたち』

2022年11月9日

平岩 千代子

社会福祉士

2021年3月医療福祉ジャーナリズム分野修士課程修了



<https://dpj.jnapcdc.com/archives/2828>

本を書きたくて大学院に入学

- 共著はあったけれど…
- 節目で自らを振り返る絶好の機会
 - 実家での父の療養生活、入院、看取り
 - 高齢者の住み替え相談
 - 人生の最終段階のあり方(暮らし、終の住まい)にまつわることをテーマにしたい
- 修士論文:『認知症当事者の主権回復に挑んだ3人の看護師
～ライフヒストリーから新しい道を切り開いた要因を考える～』
- 修論発表審査会と106歳で大往生した祖母の葬儀が重なる大ピンチ

心筋梗塞で入院、ステント治療を受けた後
「身体拘束同意書」に署名を求められた
↓
父が縛られることに、同意はできない!

本づくりを目標に、修論作成

- 3人の主人公選びの極意

- 認知症の人たちの主権回復という先駆的な目標を達成し、社会的に顕著な功績が認められている
- 生き立ちも実践の場も全く異なる3人

田中とも江さん：見習い看護婦からスタートし介護保険の身体拘束規定のきっかけをつくった

小藤幹恵さん：大学病院で身体拘束ゼロを達成し、いまは県の看護協会長として影響力を発揮している

永田久美子さん：認知症のある人の当事者活動を実現した先駆者で、「認知症とともに生きる希望宣言」を認知症本人が社会に向かって発言できるように支援しつづけた

- ゆきさんのご指導

- ゆきさんから投げかけられる疑問。徹底して背景を調べる
- 主人公本人だけでなく、関係者情報から事実をあぶりだす。本人の見解、関係者の見解。
- 「です、ます」調で執筆する

出版社、編集者

- ゆきさんのご尽力で、日本看護協会出版会の編集者村上洋一郎氏に
 - 第一目標を日本看護協会出版会に
 - ゆきさんのえにしネットワークから編集者を選び出していただく
- 編集者からのご提案
 - それぞれの立場ごとの「時代の常識」に対する「カウンターとしての挑戦」を浮き彫りに
 - ケアとリスクをめぐる矛盾やジレンマに、医療者と社会はどう向き合うべきか
 - 病や老いを抱えながら、社会の中で人はどのように「自由」であることが理想なのか、読者が考えるきっかけに
 - 事実を網羅的に説明しつくすのではない
 - 個々のナラティブがもつ説得力を生かす

出版までのプロセス

- 2月18日 修士論文審査会后、ゆきさんからコンタクト
- 4月15日 Nursing Todayブックレットシリーズでの刊行を検討
- 4月21日 「認知症と拘束」を仮題。構成案。執筆スケジュールの提示
- 4月28日 修論リライトについて、面談打合せ(初顔合わせ)
- 5月1日
- ~6月30日 原稿執筆
- 7月26日
- ~9月10日 ゲラ刷り、校正
- 9月7日 タイトル最終決定
- 10月10日 初版第一刷2000冊
- 12月10日 第二刷1000冊

♥ゆきさんからのプレゼントに感激♥

奥付の変遷

執筆：平岩千代子、大熊由紀子

→ 執筆：平岩千代子

→ 著者：平岩千代子

思いがけない反響

- 家族が身体拘束を受けたつらさを身近な人たちが体験
- 大学病院の救急救命センターで働くナースの挑戦
 - 夜勤明け朝食時に90歳の患者さんのミトン抑制を外す
 - 抹消ライン装着のまま、看護師2名で椅子にトランス
「ぜんぜん座れてる！」
 - 昨日まで食事介助をしていたのが、自分で摂取。
 - これまでは命と安全を天秤にかけて抑制を支持してきた。
 - 行動ひとつで患者さんがかわる。看護は生き物だと感じた。
 - ジャーナリズムの力は偉大です！

清山会医療福祉グループのみなさま

● 100冊ご購入。99人からA4、56ページに及び寄せられたご感想

- 法人の理念、権理についての学びに言及 → 理念が現場に浸透！

法人の理念：自立と共生の権理を尊ぶナラティブな関わり

RBAアカデミー：自分の人生の主人公として主体的に生き（自立）、価値を認められて人とつながりながら生きること（共生）は、人の命に授けられたあたりまえの権理です。一人ひとりへの配慮を尽くしながら、障がいとともに生きる人が自分の権理に目覚め、主体としてつながりながら生きることを応援する責任があること（権理ベースのアプローチ）を学び、専門性を高めていきます。

【権理ベースのアプローチ（Rights Based Approach = RBA）】

- フィジカルロックはしていないが、スピーチロック、過剰な介護も形の違う拘束との気づき
- 自分が身体拘束をしたことがある、忘れられない辛い思い出。入院時に身体拘束同意書がセットで渡される実態。利用者、入居者が入院したときに受ける身体拘束を多くのスタッフが経験
- 身体拘束の歴史を繰り返し伝えていくことの意義：バトンをもらう

出版したことによる学び

- 言葉のもつ力、伝えることの意義

- ナラティブの力

- わが身に置き換えて考えないのは自分とは違うという差別（田中とも江さん）
- 看護師という以前に一人の血の通った人間であれ（田中とも江さん）
- 尊厳は人の身体に宿る。命と尊厳は分けられない（小藤幹恵さん）
- 見えない拘束の罣（永田久美子さん）

- 多くの人々の心に届く、ゆきさんの文章

おかしいことを「おかしい」と気づく、場の空気に飲み込まれない、「しかたがない」とあきらめない。解決の方法を探る。病気や障害に見舞われた人々の身になる想像力。人々を仲間にしてしまう人間的な魅力

- 私でも現場で働くケアスタッフを応援できるかもしれない

ゆきさんと
編集者村上洋一朗さんの
ご尽力により
出版することができました

本当にありがとうございました
心からの感謝をこめて